

西村麻子さん●アナウンサー

## 伝えたいのは、人の「思い」です

2007年の世界陸上大阪大会を前に、果敢にも金メダリストとのレースに挑んだ女性アナウンサーがいます。スタートラインに立った時、思わず一人のアスリートに戻ってしまったという正直さは、報道人としての真摯な姿勢にも表れているようです。報道を通じて彼女が伝えたいのは何なのでしょう。伝えることの意味とは、何なのでしょう。



にしむら あさこ

1977年、京都府生まれ。同志社中・高校を経て同志社大学商学部を卒業するまで陸上部に所属し、100m・200mの選手として活躍。高校時代はインターハイ・国体に出場し、女子200mで京都府新記録（24秒53）を樹立。2000年毎日放送に入社。現在、夕方のニュース番組「VOICE」でキャスターを務める。

全精魂を傾ける「0・01秒」  
そこから無限の宇宙が広がる

——2007年の世界陸上大阪大会では「日本一足の速い女子アナウンサー」として、一躍名を高められたそうですね。

**西村** 世界陸上のリポーターに選ばれまして、その事前番組の中でアトラクタ五輪の男子110mハードル金メダリスト、アレン・ジョンソン選手と競争させていただく機会があったんです。ジョンソン選手は110mハードル、私はハードルなしの100mを走って、14秒05で私が勝ってしまいました。

——それは、テレビ的にはどうだったのでしょうか（笑）。

**西村** 会社ではブライキングの嵐でした。生放送だったので、制作の方々は「西村、生まれ！」と叫んでいたらしいです（笑）。

——お父様（彰さん・72年経済卒）が同志社大学体育会陸上競技部の監督をしておられるのですか。

**西村** ジョンソン選手との競争が決まったことを父に話すと「会社を休んでも練習しろ」と言われまして。出勤前と退社後の練習を3週間続けたので、練習し過ぎてしまったんでしょうか。レース後、父は「後半の走りがよかった！ あれを

覚えておけ」と言っていました（笑）。

——西村さんはお父様の影響で陸上を始められたのですか。

**西村** 父だけでなく、母（桂子さん・76年文卒）も陸上選手だったんです。父は400mハードルでアジア2位、母は100mで日本5位。姉（清香さん・99年経済卒）も学生時代は100mハードルの選手という、文字通りの陸上一家。物心ついた頃から、日曜は家族揃って御所や宝ヶ池にジョギングに行くのが習慣でした。すると同じように走っている家族がいるものですから、ああ、この家族も日曜は走ってから朝ご飯なんだと思っ

ていました（笑）。

——中学校では当然陸上部に入られた。

**西村** 同志社中学で陸上部に入ったことを父に報告すると、お祝いをくれました。1キロの砂袋が10本入るベスト。これをウォーミングアップの時に着て走りなさいと。高校生の時は誕生日プレゼントに、筋肉量を増やすプロテインをもらいました。「速く走るための努力をするのは当然」という雰囲気の家の中にあつたので、高校時代は部活が終わって帰宅した後さらに一人でウェイトトレーニングをするという生活でした。最後まで続けられたのは、私自身なによりも陸上競技が楽しかったからです。試合当日、力がピークになるように練習計画を立てる過程も楽しかったです。

——目標を立てて、それに向かって努力するのが好きなタイプですか。

**西村** 才能がないので、日々努力して積み重ねるしかないですよ。それでようやく人並みになれる。どうすれば私も日本一になれるのかと父に尋ねたことがあつたんです。父はひとこと、「日本一努力すればいい」。実際そうして日本一になった父の言葉でしたので、高校生の私にとつては重みがありました。

——陸上競技の大きな魅力は何ですか。

**西村** 陸上は非常にシンプルな競技だと思います。気象条件なども関係しますが、その人がどんな練習や暮らしをしてきたか、今どんな精神状態にあるかなど、すべてが集約されて正直にレースで露呈される競技なんです。0・1秒というのは陸上では非常に大きな意味をもつ数字です。もつと言えば、0・01秒にのぎを削る。この広い世界にあつて、そんな一瞬のような時間だけ速くなりたくて競うなんて、考えてみれば不思議な競技です。でもその「一瞬」には、今お話ししたようにいろんな要因が含まれているんですね。0・01秒速くなれるのなら何でもしたいし、何だってできる。この「一瞬」から外をのぞくと、ここから無限の宇宙が広がっているように感じます。

——同志社中学に入ったのはご両親のお考えだったのですか。

**西村** 一貫教育の同志社に入れば、中学から大学まで10年間、勉強しながら好きなスポーツに没頭できるだろうと両親が考えてくれました。その環境を作ってくれたことに心から感謝しています。そして、学業とスポーツの両方ができてもけつして驕ることなく、人間としても豊かになれば、さらに人生は広がっていくんだということを同志社で学んだよ

うに思います。

アテネ五輪で見つけた  
報道の醍醐味

——現在、ニュース番組のキャスターを務めておられますね。待ったなしの生放送を長期間務めるとなると、瞬発力と持久力の両方が要求されると思います。走り続けるための秘訣はありますか。

**西村** もともと「よいい、ドン！」という感覚は大好きです（笑）。緊張感も大好き。結婚して出産するまでは、本当に24時間仕事に没頭していました。倒れる寸前まで頑張っていましたけど、子どもを産んだ今は仕事に全力投球はできません。本当はもつと取材にも行きたいのですが、今は家族を大切にしたいし、子どもが最優先。帰宅すると子どもと遊んで、ゆったり過ごします。家に帰ると緊張が緩み、会社に行くときまた緊張を取り戻す。オンエアの間は全神経を集中させる。今はこれで自然にバランスがとれているのだと思います。

——学生時代からアナウンサーを志望しておられたのですか。

**西村** そういう気持ちはありましたが、学生時代は本当に走ってばかりで、アナウンサー養成学校などには通っていません

んでした。毎日放送には一般職として採用されましたので、スポーツ部に行けたらいいなと思っていたところ、入社前に会社からアナウンサーをやってみないかと言われたんです。世界陸上を観戦しにスウェーデンやスペインなどへ家族旅行をしたことがあったのですが、女性リポーターがグラウンドで取材をしているんですね。あんなに選手に近いところで仕事をできる人がいるんだなと思ったのが、アナウンサーっていいなと思った最初です。でも、まさか自分になるとは思ってもみませんでした。

——ずっと陸上を続けてこられた経験が現在のお仕事に役立っていると思われることはありますか。

**西村** 毎日こつこつと練習を積み上げていく姿勢は仕事もまったく同じだと思えます。足が速いのは仕事には全然役立ちませんが、世界陸上の時だけはダイレクトに役立ちましたね。朝原宣治選手（95年商卒、総合政策科学研究科在学中）も早稲実紀選手（95年商卒）も父の教え子で、よく自宅に来ておられましたし、他の選手たちとも仲がよかったですから。その彼らが世界陸上で頑張っているとなると、こちらも然りポルトに力が入りますし、陸上をしていた知識も役立ちま

した。同社社に入ったこと、陸上をしてきたこと、いろんな友人や先生に出会ったこと、世界陸上を観にいったことなどが、こうしてだんだんつながっていくんだなと思います。それらの経験がどこかで交わり、また交わらなくても広がっていくんだなという感覚。それは、とても気の長いマラソンなのかもしれません。

——アナウンサーというお仕事の魅力は。  
**西村** 楽しいことばかりではないし、悲しい事件を伝えなければならぬこともあります。本場に面白い仕事です。毎日学ぶことが多いです。以前はバラエティー番組にも出ていましたが、タレントさんの頭の回転の速さ、気の配り方など非常に勉強になりましたし、「VOIC E」でスポーツコーナーを担当していた時はアテネオリンピックを取材していくこともできました。

アテネへは、とりあえず航空券があるから行つていらつしやいと言われ、デジタルムービーカメラを持たされて私一人で行つたんです。選手村には入れませんが、選手たちが競技の後で街に出てきますね。そこで出会えたら、その場でインタビューを申し込んでいきました。朝原さんと柔道の古賀稔彦さんにも取材できましたし、ハンマー投げの室伏広治さん

が銀メダルを獲得した直後にお話を伺うこともできました。

その際ドーピングの話題が出て、もしも一緒に闘ってきた仲間がそういうことをしていたとしたら「僕は悲しい」と、室伏さんがおっしゃったんですね。スポーツ選手として一流になろうと思うなら、ドーピングの誘惑は常にある。でも、そこで手を出してしまうか出さないかは本人の意識の持ちようであり、モチベーションの高さの問題なんだと。そして帰国して明日から再び「VOIC E」に出るといふ夜に1位の選手のドーピング検査が陽性と判明し、翌日、室伏さんが繰り上げ金メダルになった。その日の夕方のニュースで室伏さんのコーナーを設けて、室伏さんの無念さや悲しみを伝えることができました。その時はこの仕事をやっていてよかつたと思えました。現場で取材して、皆さんが知らなかつた一流選手の思いを表現し、伝えることができたとこの充実感。これがこの仕事の醍醐味だと思えました。

### JR事故取材で知った人と人とのつながりの大切さ

——お仕事を通じて、人の「思い」を伝えたい。

**西村** そうですね。事実に対して誠実であることはもちろんですが、その上で人の思いを伝えたい。一つの事実に対して、いろんな立場の人がいますね。難しいことではあるのですが、できるだけ多くの人の気持ちを伝えたいです。まったく同じ原稿を読むにしても、背景やそれに関わった人の気持ちを知って原稿を読むのと、単に文字を追って読むのでは、聞いている人はきつと違って感じてくださる。だからこそ、いろんな背景を学ぼうと思えます。

2005年の尼崎JR脱線事故の時、最後から2人目に救出された学生さんのご両親と知り合つたんです。事故後1ヵ月間意識が戻らないまま集中治療室におられた息子さんに、ご両親が会わせてくださいました。もちろんカメラは入りませんでしたが、その学生さんにどんな言葉をかけてよいか分からない。ずっとそばにいたいことしかできなくて、それから連日病院に通い、共に時間を過ごしました。40度の高熱が下がらない時期、足を切断しないといけないかもしれないと言われた時期などがありましたけど、3ヵ月経つて彼が意識を取り戻した時に「このことを伝えてほしいし、記録に残してほしい。カメラを入れてもらつてい

いですよ」と言つてくださったんです。それから1年間取材を続けました。共に時間を過ごしたことで、こうして気持ちに通じ合うことがあることをその人から学びました。

あの事故では、亡くなった107人の方々の思い、遺族の思い、運転士さんの思い、JRの思い、報道側の思いと、いろんな立場の人の思いが凄まじいまでに渦巻いていたと思います。事故の翌日現場に行くとき、そのために苦しくて息がでないほどでした。その時に、人の思いを伝えるというのは本当に難しいことだと思えました。被害者の方々も、今では前を向いて歩いている姿を見てほしいと思つておられると思うんですね。でも報道では、やはり事故の時のことにふれざるをえない時もある。そこにも報道の難しさを感じます。それでも、私は「思い」を伝えたいです。

——昨今、マスコミの取材倫理が厳しく問われています。それでも一歩踏み込まないと分からないことも多いと思えます。西村さんはどんな姿勢でお仕事にあつておられますか。

**西村** 私たちは取材先の方に誠心誠意尽くすしかありません。それでも取材はいやだと言われればそれ以上踏み込んで

いけない領域はあります。でも報道する側、される側と言えども、結局は人と人が向き合うことだと思っんです。すべての出会いは日常の中にある人と人とのつながりだと思えますから、たとえ仕事であっても、そのスタンスは変わらないつもりです。

——競技生活にお仕事にと、さまざまな厳しい経験をされたと思います。それを乗り越えてこられた道を、若い方々にメッセージとしてお話しくださいませんか。

**西村** 学生時代、筋断裂というけがをしたことがあります。切れた筋肉は縫えないんですね。元に戻らないので、周囲の筋肉を鍛えることによって再び走れるようにする。人の気持ちもそういうものだと思います。完璧な人などいないし、誰でも傷ついたり乗り越えられなかつたりします。誰にでも弱さがある。いろんなことを抱えながらそれでも生きていくのですから、限られた人生、笑つて過ごす時間が多い方が楽しいに決まっています。たとえ強くなれなくても、自分の弱さを認識しているだけでもおのずと生き方は違つてくるのではないのでしょうか。心の痛みはきつと、感じた人にしか共感できないものですから。（聞き手・當村まり、2007年11月30日、毎日放送）

## 山下修平さん●JOC専任情報・科学スタッフ 日本選手団の活躍を支える 情報戦略スタッフ

今年が北京オリンピックが開催されます。日本選手の活躍を期待しておられる方も多いことでしょう。一流アスリート達を支えるのはコーチやトレーナーだけではありません。世界中にアンテナを張り巡らせ、最新の情勢やスポーツ医学の情報を収集・分析する人たちもまた、代表選手たちをサポートしています。その一員として多忙な毎日を送る卒業生を訪ねました。



やました しゅうへい

1977年、大阪府生まれ。同志社中・高校を経て2000年に同志社大学経済学部卒業。03年、筑波大学大学院体育研究科スポーツ健康科学専攻修了。十文字学園大学・短期大学、千葉商科大学で非常勤講師、茨城県立医療大学で嘱託助手を務め、現在、財団法人日本オリンピック委員会専任情報・科学スタッフ。情報・医・科学専門委員会情報戦略部会の部会員。元ラグビー女子セブンス日本代表ヘッドコーチ。

### 科学的データの裏付けを行い 日本選手団を支える

——JOCの情報戦略部会で、どのようなお仕事をしておられるのですか。

山下 私は情報戦略部会を切り盛りするオフィサー的な役割を担っています。仕事の性格上あまり詳しくはお話しできないのですが、情報収集や分析を行うとともに、*やまびな*（まな企画立案）をしています。日本陸上競技連盟や日本水泳連盟など、それぞれの競技団体をまとめて日本代表選手団として国際総合競技大会に派遣しているのがJOCですので、各競技にお

ける選手個人の詳細な分析は各団体がを行い、もっと大きな枠で日本代表選手団の力を分析するのが私たちの仕事。具体的には世界選手権でどの国と対戦してどんな成績だったか、各競技でどの国が日本チームのライバルになってきているのかなどを調べ、世界におけるチームジャパンのポジショニングを分析しています。

経済で言うと、GDP（国内総生産）などの指標によって日本経済の国際競争力を見ますね。そのスポーツ版の情報を集めて分析する、内閣情報調査室のような情報（インテリジェンス）を扱う部署

と考えていただくと思います。スポーツ情報戦略については、たとえばオーストラリアではAISという大きな国立研究所があり、アメリカならUSOC（アメリカオリンピック委員会）自体が大きな組織で、その中に情報（インテリジェンス）を専門的に扱う部署や機能があります。

実際にはインターネットで情報を集めることもありますが、現場でしか分からないこともありますから、国際試合に足を運ぶことも。今なら北京オリンピックを控えていますので、現地を視察して強

化成現場に的確な情報を伝え、サポートを行っています。科学や医学の専門家の方々の最先端の情報を現場に提供するのも大きな仕事。そういう意味ではスポーツ科学の研究を私もきっちりやりたいと思いますし、専門家と現場をつなぐヒューマンネットワークの構築もまた、情報戦略の重要な仕事だと捉えています。

——世界を見据えて、夢を感じさせるお仕事ですね。

山下 でもスポーツの世界では、冗談ですが「30歳では雑巾がけもまだ早い」と言われるんですよ（笑）。ただ情報戦略部会の仕事は昔からある学問領域に乗っかっていてるものではなく、ここ10年近くの間形として整ってきたものです。2000年にスポーツ振興基本計画が策定されて日本の国際競技力の総合的な向上が図られるようになり、2001年にはJOCが「ゴールドプラン」という戦略的な強化プランを作りました。オリンピックにおける日本のメダル獲得率を、10年間で全メダル総数の3・5パーセント以上に引き上げるというのがスポーツ振興基本計画で謳われた政策目標です。やはり日本選手がオリンピックで活躍すれば、社会に与えるインパクトは強いです

から。そういうトップアスリートの強化育成をJOCとしても主体的に取り組んでいこうというわけです。このJOCゴールドプランができたことにより、情報活動にも力を入れようということになった。私たちの仕事は試行錯誤を経て、ようやく一つの部門として機能し始めたところ。私たちのひと世代前の方々が一生懸命作ってこられたところへ、私は途中から入らせていただいたようなものです。

集めて分析するという専門家を置き、選手的に的確な情報を与えるというのは、今では多くの競技で見られますが、ラグビーはかなり早い時期から取り入れていたんです。

### 「あの円陣に入りたいたい」

——「ジョホールバルの歓喜」が  
進路を決めた

——中学から高校まで、ラグビー部で活躍しておられたそうですね。

山下 同志社高校時代、あと一步のところまで花園行きの切符を逃したんです。その大事な試合に負けた瞬間に思ったのが「車の免許取りにいこう」でした（笑）。先輩たちには「頑張れよ」と思いながら、自分はそこでパチッと気持ち切り替わってしまった。大学2年までは誰がもうラグビーなんてするものかと思っていたんです。遊びで草野球チームを作っていました。体育会で真剣にスポーツをするということはありませんでした。

そんな時、たまたま人数が足りないからと誘われて行ったラグビーチームに、いま政策学部准教授の川井圭司先生がいらっしゃった。そこでクラブチームの中でラグビーを再開して、彼らから改めてスポーツの面白さを教えてもらいました。自分の休みを削って試合に行ったり

トレーニンングに勤しんだりする中で、好きだからラグビーをしているという気持ちを取り戻した。ラグビーや草野球で人の輪が広がるなど、スポーツって面白いなと思いました。川井先生には感謝しています。

——大学で再びスポーツの面白さに出会われた。

**山下** でも、将来何になりたいかもまだ決まっていまませんでした。サッカーのワールドカップのアジア予選で、「ジョーホルバルの歓喜」がありましたね。日本代表がフランス大会行きを決めた試合です。単なるスポーツ中継という感覚で何気なくテレビを観ていたところ、同点のまま後半が終了して延長戦に行く時、岡田監督が選手を集めて円陣を組むんです。控えの選手もスタッフも、全員を呼んだ。その円陣を見た時に「ああ、こんなトップスポーツでもこういう強い絆があるんだな」と。これならもう一度現場に行つて、今度はスタッフとしてでも選手たちの間に入り、一緒に闘つてみたいと思いました。ちょうど大学2年だったと思います。そろそろ周囲は就職活動のことを考え始める頃ですよ。茶色かった髪を黒に戻したりして。そういうのを見て「何か違うな」と思っていたので、

これだと思つてスポーツの勉強を始めました。

——具体的にはどんな行動を起こされたのですか。

**山下** スポーツの世界に入りたいけど、どうすればいいか分からない。思い付いたのがトレーナーやコンディショニングコーチになることでした。アメリカではATCという準医療従事者としてのトレーナー資格が取れます。でも、そうすると日本で就職があるのか。ずぶの素人で英語も話せないのにアメリカに行つて大丈夫だろうか。そこで日本の大学院を調べて候補を四つに絞り、すべて見学にいった結果、筑波大学に決めました。当時の筑波大学周辺は本当に学校以外何も無いというイメージ。「一から勉強するならこの環境だ」と思つたんです。

ちょうどその時、中・高校の同級生が筑波大学に在学中で、彼女の研究室がトレーニンング科学専攻だったので先生に会いにいきました。大学院を受けましたが、準備不足でその時は不合格。今度はスポーツ医学研究室を卒業した先輩を紹介していただき、スポーツ医学研究室の研究生として学ぶことになったんです。

当時はコンディショニングの研究をしていました。選手のパフォーマンスを発

揮するための最良の方法を科学的に研究する学問です。修士論文は、音楽を聴きながら運動すると自律神経がどう変化するかという内容でした。現在はウォーミングアップの研究を続けています。

——本当に多くの方々との出会いに恵まれたのですか。

**山下** 研究生時代は大学院生たちに親身になって助けてもらったので、当時の友人とは今も仲がいいです。同志社では西村卓先生のゼミで大変お世話になりました。中学から大学まで、同志社では才能の芽を摘まない教育をしていたのだと思います。同級生も非常に刺激的な人たちが多く、私も負けられないという気持ちが強いですね。

**チーム力は掛け算で決まる**

——スポーツの世界でも、人は大きな財産ですね。

**山下** そうですね。私たちの仕事はスポーツだけでなく、いろんなことを知っている方がいい。サポーター役というのはトップアスリートでなかった人にこそできる仕事だと思っています。団体競技はもちろん個人競技にしても、ある程度チームとして上を目指すわけですね。チームというのは「みんなの掛け算」なんです。誰かの力が「1」を切ると全体の足を引

つ張つてしまい、チーム力は1以下になつてしまう。それを自分の中でいかに1に近づけていくかが問われます。

ただ、サポーター役が頑張れば選手の力を上げられると考える人がときどきいますが、選手の力を向上できるのは選手本人のみなんです。そこを勘違いしないようにする必要があります。たとえば水泳の「チーム北島」やマラソンの「チームQ」がありますね。選手がいてコーチがいて、トレーナー、栄養士、ビデオを撮る係などさまざまな人がいる。でも、選手の力を上げるのは本人にしかできないこと。選手自身が一生懸命にトレーニンングをするしかありません。選手が限りなく100パーセントに近い力を発揮できるように環境を作るのがサポーターの仕事だと考えています。

——コーチにしても「教える」のではなく、「気づかせる」ことが大事だと聞いたことがあります。

**山下** その通りです。いくら能力があり技術が優れている選手でも、頑張る気持ちがあれば上達しません。逆に下手でも、頑張れる人には大きな可能性があります。気持ちが一番大切だと思います。こう言う根性論に聞こえるかもしれませんが、そんな世

界でも強い気持ちのない人は勝ち残つてはいけないのではないのでしょうか。

**良心碑から始まる**

**同志社スポーツであつてほしい**

——同志社の学生スポーツに対してはどのような印象をお持ちですか。関東の大学に比べて、関西の大学は何かと予算が少ないという現実もあります。

**山下** 非常に難しい質問ですね。大学のユニフォームに企業ロゴを付けて試合をするのが本当によいことなのかどうか。すでにプロとしての感覚を持っているであろう彼らは、それとちゃんとした社会人になれるのだろうかという懸念はあります。

——学生生活4年間で、まず一生懸命頑張るのが大学スポーツの良さだと思いませんか。そしてグラウンドばかりでなく、勉強もしっかり頑張つてほしいですね。

——それでもやはり、同志社の選手には勝利を期待してしまいます。

**山下** 勝つことは重要ですが、それより「勝とうとすること」と「敗北を受けいられること」が大切だと最近思うんです。スポーツというのは、試合に負ければ言い訳はできません。負けの原因が必ずある。それを自分で受け入れることが必要です。競つていく中で自分に足りな

いものに気づき、勝つために何をしていたかが大切。実際の勝ち負けはまた別の話です。

スポーツ自体に価値があると私は思っています。もし勝つことだけが目的なら、チームのレギュラーになれず、試合に出られない学生たちの心はどうなるのでしょうか。同志社の学生たちにも常にチャレンジしてほしいし、フェアであつてほしい。これらは新島先生のフロンティア精神と「良心の碑」に通じることではないでしょうか。スポーツ自身が内包している教育性は非常に大切だと思つています。

——同志社大学に2008年、スポーツ健康科学部が設置されます。ご意見があればお聞かせください。

**山下** 新しい学部については、地域貢献も行ってほしいと思います。たとえば教員や学生が地域の子どもの才能を発掘する。京都でもそのような実験的な取り組みや土壌づくりが始まればいいですね。日本のスポーツ振興や研究において、先頭集団の中に常に見え隠れしている京都の大学であつてほしいです。

(聞き手・當村まり、2007年12月3日・同志社大学東京オフィス)